様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：３２６３１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２５４６

研究課題名（和文）19世紀フランス文学におけるイマゴロジー研究

研究課題名（英文）Study on Imagology in 19th-century French literature

研究代表者
畑　浩一郎（HATA, Koichiro）

聖心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：２０５１４５７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は 19 世紀のフランス文学を題材に、特定の国や地域についてのイメージ形成が、文学創造の場でどのように行われるかという問題を扱った。作家は必ずしも自由に作品世界を作り上げるのではなく、当時の社会に涵養されているさまざまな偏見、誤謬、憧憬などの影響を必然的に受けることになる。さらにそうして生まれた文学作品が今度は、社会に新たなイメージを提供する側に回る。作家と社会との間に交わされる、こうした目に見えない情報交流のあり方を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の扱うイマゴロジーという概念は、1990年代よりフランスで提唱され始めた比較文学の新しい手法である。それは文学作品における特定の国や地域の現れ方を考察することを目的とするものだが、これまで日本ではこの方法を用いた文学研究の成果は皆無であった。個別の作品研究にとどまらず、19世紀フランス文学を見渡す形で、作家と社会とがとりもつ関係に着目した本研究は、今後の検討に値するいくつかの興味深い知見を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：Using nineteenth-century French literature as source material, this research considers how the image formation of a country or region occurs within the literary creative process. Authors do not usually create imaginary worlds out of thin air. They are inevitably influenced by prejudices, errors or aspirations permeating the society of their time. Furthermore, literary works created through this process will, in turn, be integrated with other discourses offering a new image of their society. This research showed exchanges of information between authors and society that are not usually visible at first glance, but which are the foundation of an interrelationship between the literary and the social sphere.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学　19世紀　イマゴロジー　オリエンタリズム　旅行記　地中海　東方問題　オリエント

１．研究開始当初の背景

イマゴロジー（imagologie）というのは、1990 年代後半よりフランスで提唱され始めた比較文学の手法である。それは文学作品における特定の国や地域の現れ方を考察することを目的とする。研究代表者が、この研究手法を知ったのは、2005 年にパリ第４大学で審査を受けた博士論文の執筆中のことであった。この手法の秘めた可能性は大きく、単独の作品解読のみならず、作品間の相互干渉（間テキスト性）、さらにはその作品が執筆された当時の社会背景を視野に入れた、多様なアプローチを可能にしてくれるもののように思えた。ただし、博士論文執筆時にはその手法を十分に取り入れた考察を実施する余裕はなかった。その後、フランスのみならず、米国においても、イマゴロジーに関する理論的、実践的研究は徐々に進展を見せた。だが日本においてはまだ、この手法を用いた文学研究の成果は全く見られなかった。それゆえ本研究開始時には、イマゴロジーという研究手法そのものの可能性を理論的に探り、さらにそれを実際の文学作品に応用した時にどのような知見が得られるのかを考察することが課題となっていた。

２．研究の目的

本研究の目的のひとつは、ある特定の国や地域を描き出す際に、外部から作家に作用することになるイメージ形成の力を探ることである。題材となるのは、19 世紀フランス文学の諸作品となる。その際、前提となるのは、文学者は異国の描出において必ずしも自由であるわけではなく、彼らは意識的にまた無意識的に、自らが所属する社会が涵養する観念やイメージに影響を受けざるを得ないということである。ではそのような影響を与える主体にはどのようなものがあるのだろうか。当然、作家がこれまでに行った読書体験の影響（間テクスト性）、さらには同時代の政治的、外交的、文化的出来事も含まれるだろう。そうした事象が文学作品に作用するプロセスを探ることが重要となる。

ふたつめの目的は、こうしたプロセスを経て生み出された文学作品が、今度は社会の共通認識に影響を及ぼす可能性を見ることである。こうしたアプローチは、作品の受容論とも接近するが、本研究ではあくまで特定の国と地域にまつわる考え方、イメージのみに限定するため、そこから得られる知見はより具体的なものになるはずである。

文学者と社会との間で相互に作用しあうイメージ形成のメカニズムを探りながら、イマゴロジーという文学研究の手法そのものの可能性を考察していくことが、本研究の目的となる。

３．研究の方法

研究の方法としては、まずイマゴロジーという本研究の中核概念についてより確かな定義づけを行う必要がある。そのためには、近年発表された、イマゴロジーについての理論的文献を精査し、その射程を見極める作業から始めなければならない。

その上で、19 世紀フランスの旅行記、小説、詩作品から、本研究を実行するために適切と考えられる考察対象を抽出していく。当然、文学者の直接の旅体験を土台に執筆される旅行記（シャトーブリアン『パリからエルサレムへの旅程』など）から、詩人の自由な空想力から生み出される作品（ユゴー『東方詩集』など）の間には、ある国、土地に対するイメージ形成のあり方には大きな隔たりがある。その両極の間に、例えばネルヴァルの『東方紀行』のような、旅の実体験と作家の想像力が微妙に入り混じった作品もある。作家の実体験と想像力という、イ

メージ形成を促進するふたつの重要なファクターの作用の仕方に着目しなければならない。

さらにイマゴロジーをめぐっては、厳密に文学の領域にとどまっていては取りこぼす知見がありえる。絵画、演劇、音楽などの他の芸術領域で生み出される作品との関わり、さらには同時代の政治・外交的事件（ギリシア独立戦争など）に関する新聞雑誌記事、政治パンフレット、議会での演説などにも目配りしつつ、それらの文学的影響を探っていく。

本研究の特徴として、学際的手法を取ることが不可欠となる。具体的には、間テクスト性や受容論といった文学研究の手法、さらには歴史学や社会学、心理学の知見を応用することで、「異国」にまつわるイメージ・神話が文学創造の場で果たす多様な役割を検討していくことになる。

４．研究成果

３年間の研究において、以下の知見を得ることができた。

1）イマゴロジーの理論的定義

イマゴロジーという概念を考える上で重要なのは、特定の国や地域の表象のされ方そのものよりも、むしろ表象が行われる前段階にある、混沌とした情報とイメージの混合物のありようであることが確認された。作家はその混合物なくして、決して単独で作品世界を構築することはできない。その混合物は、一方向に考え方のバイアスがかかっている場合もあるし（スペイン、あるいはユダヤ人のイメージ）、また多極化（近代ギリシアのイメージ）していることもある。その混合物を前にした文学者の実際の振る舞い方については、類型化が可能であろうと思われる。それが今後の検討課題として残った。

2）ギリシア独立戦争をめぐるフランス社会の動き

19 世紀前半のフランス人にとって、ギリシアという国はある種の両価性を持っていた。つまり、西洋文明の発祥地として特権的な地位を享受する一方、中世以降この国がたどって来た歴史は「堕落」として断罪されていたのである。ところが、1820 年代にギリシアがオスマントルコからの独立を求めて武器を取ると、全ヨーロッパに、キリスト教徒である同胞を支援しようとする熱狂的な機運が高まる。それは政治、宗教、経済、外交など、さまざまな側面で興味深い議論を生み出すが、それが文学作品にどのような影響を及ぼしたかを考察した。現在では忘れ去られてしまっているが、近代ギリシアを賛美するさまざまな詩作品が作られ、フランス人の世論形成に貢献したことが確認できた。また文学以外にも、ドラクロワ（絵画）、ロッシーニ、ベルリオーズ（音楽）といった他の芸術領域でも同様の動きが見られ、それらが相互に刺激し合う形で、近代ギリシアのイメージを醸成していったことをみた。

３）シャトーブリアンと近代ギリシア

一般に、ギリシア独立戦争と文学者の関わりというと、英国詩人バイロン卿が想起されるが、実はフランス・初期ロマン派のシャトーブリアンも、その歴史に強い刻印を残していることをあらためて明らかにした。とりわけ「ギリシアに関するノート」（1826）という、フランス本国でもほとんど顧みられてこなかったテクストを発見し、それを精緻に解読することで、作家の近代ギリシアに関する考えを考察した。

その過程で、さらに興味深い知見を得ることができた。従来、シャトーブリアンは、ヨーロ

ッパにおける親ギリシア主義(philhellénisme)ートルコからの独立を目指すギリシアを支援しようとわき起こった運動ーの旗手の一人と見なされてきたが、実はその考え方は一貫したものではなく、十数年の間に、百八十度の方向転換が行われたことが確認できたのである。かつて作家は、エルサレム巡礼の旅の途中、実際にペロポネソス半島を横断した経験を持っている。その記録である旅行記『パリからエルサレムへの旅程』(1811) を見ると、作家のギリシア人観はかなり手厳しい。彼はそこに輝かしい古代ギリシア文明を辱めるような、みじめな近代ギリシア人の姿しか見いだすことができないのである。旅行記の中での、作家のこのような見方は決して彼特有のものではなく、実はルネサンス時代にまで遡る「ギリシア人嫌い」(mishellénisme) の伝統に与するものでもあるのである。

4) ポトツキの『サラゴサ手稿』

フィクションの作品に対するイマゴロジー的手法の応用として、ポトツキの『サラゴサ手稿』(1804 年版、1810 年版) を取り上げた。ポーランドの大貴族であるポトツキが、全編フランス語で書き上げたこの浩瀚な小説は、その舞台として、スペイン、イタリア、エジプト、フランスといった地中海周辺諸国に加えて、旧スペイン植民地としてのヌエバ・エスパーニャ (主にメキシコ) を含んでいる。スタール夫人の『ドイツ論』(1813) によって、いわゆるロマン主義的な国民文学が規定される以前の、さまざまな国々の表され方は、イマゴロジー研究にとって興味深い知見を提供してくれる。さらにこの小説には、独自な観点からのキリスト教、イスラーム、ユダヤについての考察が含まれている。今後、地中海世界におけるそれぞれの宗教の捉えられ方を考察する上で、『サラゴサ草稿』は重要なテクストになりうることが確認できた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計３件)

1　畑浩一郎「近代ギリシアをめぐるふたつのイメージ ―― シャトーブリアン『パリからエルサレムへの旅程』についての一考察」、『聖心女子大学論叢』第 132 集、 p. 29-54、2018 年、査読なし
2　畑浩一郎「シャトーブリアンと親ギリシア主義 ――「ギリシアに関するノート」(1826) をめぐる一考察――」、『聖心女子大学論叢』第 132 集、 p. 19-41、2018 年、査読なし
3　畑浩一郎「ヤン・ポトツキ『サラゴサ草稿』における語りの中断について」、『聖心女子大学論叢』第 128 集 p. 3-26、2017 年、査読なし

〔学会発表〕(計３件)

1　畑浩一郎「フランス・ロマン主義時代のオリエント旅行記 ジェラール・ド・ネルヴァルの『東方紀行』をめぐって」日本観光研究学会研究分科会「観光文学研究会」、2019 年
2　畑浩一郎「フランス・ロマン主義とギリシア独立戦争」帝京大学　南欧研究会、2018 年
3　畑浩一郎「フランス・ロマン主義とギリシア独立戦争――作家シャトーブリアンをめぐって――」地中海学会シンポジウム「地中海学の未来」、2017 年

６．研究組織

(1)研究代表者

畑　浩一郎 (HATA, Koichiro)

聖心女子大学・文学部・准教授
研究者番号：20514574